

シルバーハウジングにおける居住者の 団らん生活と生活援助

—愛知県内のシルバーハウジングを対象として—

小川 正光, 橋本 明美*, 後藤 有香*

1. はじめに

我が国は既に超高齢社会となり、2055年には総人口の約半数近くが高齢者となると予想されている。その中で、高齢単身世帯の比率が高くなると見込まれる。高齢単身世帯は地域社会とのつながりが乏しい傾向があるため、社会的に孤立する可能性がある。生活基盤となる住宅と、福祉的な援助が、社会的孤立を防ぐ上で重要である。高齢者の生活特性に対応した住宅と、生活援助員（LSA : Life Support Adviser）による見守りや安否確認の福祉施策を連携させたのがシルバーハウジングである。シルバーハウジングには、居住者のコミュニティ形成の場として、「高齢者生活相談団らん室」が設けられ、居住者相互の交流を促している。

しかし、近年の調査¹⁾によると、活発に利用されていない状況がある。利用されていても、コミュニティ形成の場としてではなく、団地の集会所や事務的に利用されている例もみられ、本来の目的のために利用されていない場合が多い。その要因として、高齢者生活相談団らん室の空間計画や、LSAの参加度・運営方法等の問題が指摘されている。また、近年、高齢者の価値観や、ライフスタイルは大きく変化しており、介護保険等の高齢者福祉の仕組みも変わってきている。居住者の生活実態と要求を把握し、それらに合致したものにする必要がある。

本研究では、愛知県内すべてのシルバーハウジングを対象とした調査を行い、高齢者の要求をもとに、相互の交流を促すLSAの関わり方と、高齢者生活相談団らん室の構成について検討し、高齢者の孤立を防ぎ、今後の高齢者生活相談団らん室の方向性を見出すことを目的とする。

2. 研究の方法

LSAの勤務状況、高齢者生活相談団らん室の空間構成、利用状況、居住者の要求を明らかにするため、次の4種類の調査を行った。

① シルバーハウジングについての事業実態アンケート調査（2010年9月～11月）

対象は、愛知県内に立地するすべてのシルバーハウジングの事業関係者59サンプル

② LSAへのヒアリング調査（2010年10月～2011年1月）

対象は、①のLSAの勤務形態の分析により抽出された、11団地のLSA

③ 高齢者生活相談団らん室の1日における10分間ごとの住み方調査（2010年12月～1月）

対象は、①の高齢者生活相談団らん室の利用で、「ほぼ毎日」と回答した団地5サンプル

④ シルバーハウジングの居住者を対象とするアンケート調査（2011年1月）

*) 本学家政教育講座・学生

対象は、①で高齢者生活相談団らん室の利用が「ほぼ毎日」と回答した5団地の居住者100サンプル

3. 居住者の属性

すべてのシルバーハウジングの居住者における属性の概要を検討した。

3.1 年齢・性別

年齢をみると、75～79歳が最も多く、次いで、70～74歳が多く、70歳代が約半数を占める(図1)。75歳以上の後期高齢者は64.1%に及び、90歳以上の高齢者も4.1%いる。後期高齢者が多いことから、見守りや安否確認がますます重要になっていく。性別では、男性が32.0%であるのに対し、女性は全体の68.0%であった。男女比は概ね3:7となり、女性の方が男性の倍以上を占めている。

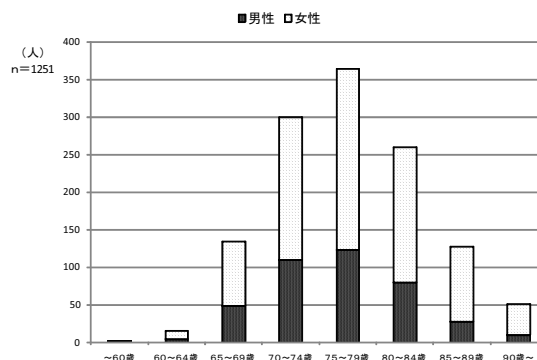


図1 年齢と性別

3.2 世帯形態

世帯形態をみると、単身世帯、夫婦世帯、その他の世帯(親子または兄弟の世帯)に分けられた(図2)。最も多いのは単身世帯の813世帯で、次いで夫婦世帯の228世帯、その他世帯の12世帯であった。単身世帯が7割以上を占めている。また、現在の夫婦も、いずれは配偶者と死別するため、今後さらに単身世帯が増加することが予想される。

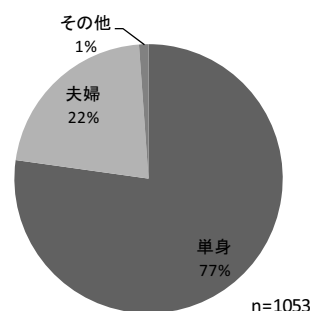


図2 世帯形態

3.3 介護度

介護保険を利用している居住者は23%、利用していない比率は77%で、利用しているものは2割程度に留まっている(図3)。介護度をみると、要介護1が最も多く28.2%、次いで要支援1が24.1%、要介護2が19.6%となっており、介護度が低い者が中心であるものの、要介護3以上の居住者もみられることから、重度の介護も必要とされている現状にある。

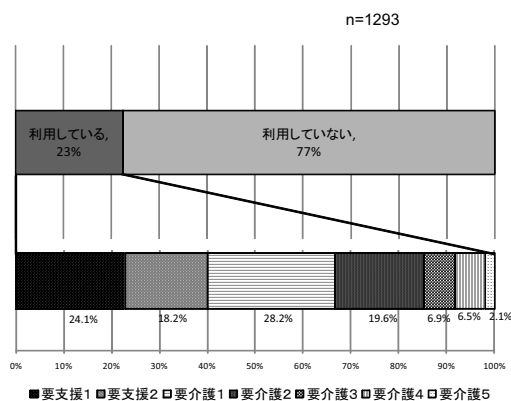


図3 介護保険の利用と介護度

4. 高齢者生活相談団らん室の構成

4.1 団地における位置

調査対象とした愛知県内のシルバーハウジング 59 団地のうち、53 団地が、高齢者生活相談団らん室を併設した集会所を設置していた。集会所の位置についてみると、居住者たちの住戸と同じ建物の中に設置されている<住棟内タイプ>が 30 団地、集会所を住棟から独立させた<別棟タイプ>が 23 団地であった。

集会所を構成する居室数は、<住棟内タイプ>が 1～5 室、<別棟タイプ>では 2～7 室で、<別棟タイプ>の方が多くの居室で構成されていた（図 4）。別棟タイプは、高齢者以外の居住者も利用可能な集会所であるため、規模が大きくなっていると考えられる。

4.2 居室のしつらえ

高齢者生活相談団らん室は、生活相談室、団らん室、LSA 事務室の 3 つの居室から成る。この 3 つの居室のタイプ別に、しつらえについて検討した（図 5）。

生活相談室は、両タイプとも洋室が多く、団らん室では、和室が多くなっていた。団らん室では、長時間くつろぐことが想定されているからと考えられる。生活相談室兼団らん室の構成は、<住棟内タイプ>で洋室が多く、<別棟タイプ>で和室が多くなっていた。LSA 事務室は、LSA の業務を効率的に行うために、すべてが洋室であった。

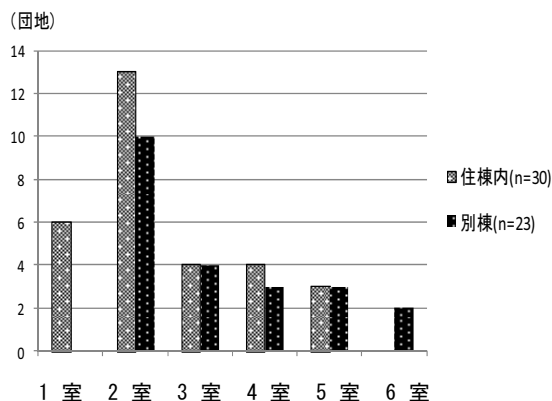


図 4 高齢者生活相談団らん室の位置別、居室数

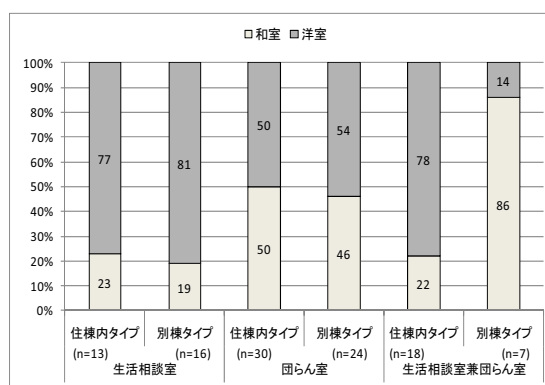


図 5 高齢者生活相談団らん室のしつらえ

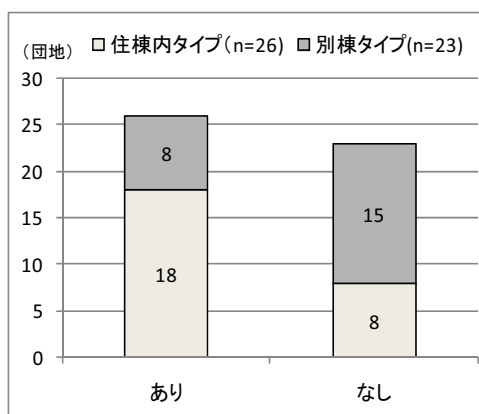


図 6 生活相談室の続き間の有無

4.3 生活相談室の続き間

生活相談室と他部屋との続き間の有無を調べた（図6）。続き間が「ある」のは26団地、「ない」のは23団地と、全体的には続き間の比率が高くなっていた。これは、高齢者が容易に部屋を移動できるようにするためと考えられる。

また、＜住棟内タイプ＞では半数以上が続き間であるのに対し、利用用途が幅広い＜別棟タイプ＞では各部屋が独立している場合が多い。これにより、各部屋を目的が異なった用途に同時に利用することを可能としている。

5. LSAの勤務実態

5.1 勤務形態のタイプ化

愛知県内のLSAの勤務形態は、LSAがLSA事務室など団地内に一定時間留まって勤務する「通勤型」と、高齢者の住戸を訪れて安否確認を行うだけの「巡回型」の大きく2つに分けられる。しかし、同じ通勤型でも、LSAの団地内の勤務時間には大きな差が見られた。そこで、この2つの勤務形態を、各団地におけるLSAの午前の勤務時間と午後の勤務時間、一週間の勤務時間の合計を算出し、「一日型」、「一日調整均等型」、「一日調整不均等型」、「半日型」、「巡回型」の計5タイプに分類した。各タイプの定義は以下の通りである。

表1 LSAの勤務形態のタイプ

I	通勤型	一日型	午前も午後も長時間にわたるタイプ
II		一日調整均等型	午前から午後まで勤務するが、週合計勤務時間が35時間以内となっているタイプ。一日型と比べ、勤務時間が短く調整されている。
III		一日調整不均等型	午前も午後も勤務するが、勤務時間がどちらか一方に偏っているタイプ
IV		半日型	午前か午後どちらか一方に勤務するタイプ
V	巡回型		LSAは基本的に委託先デイサービス等に勤務し、住宅へは各戸訪問等で巡回するのみのタイプ

5.2 団地別、勤務時間タイプ

図7は、各団地別にLSAの勤務時間を、線の長さで示し、勤務時間の特徴を読み取ることで、表1のタイプ化を行い、分類したものである。

「通勤型一日型」は基本的な型で、最も多くを占めが、福祉施設の勤務を兼ねたLSAの場合には、シルバーハウジングの業務を効率的に行い、滞在時間を少なくしている型によって工夫されている状況がみられる。LSAの業務を見守りと安否確認だけに限定した場合には「巡回型」になるが、約半数を占めているように増加する傾向にある。

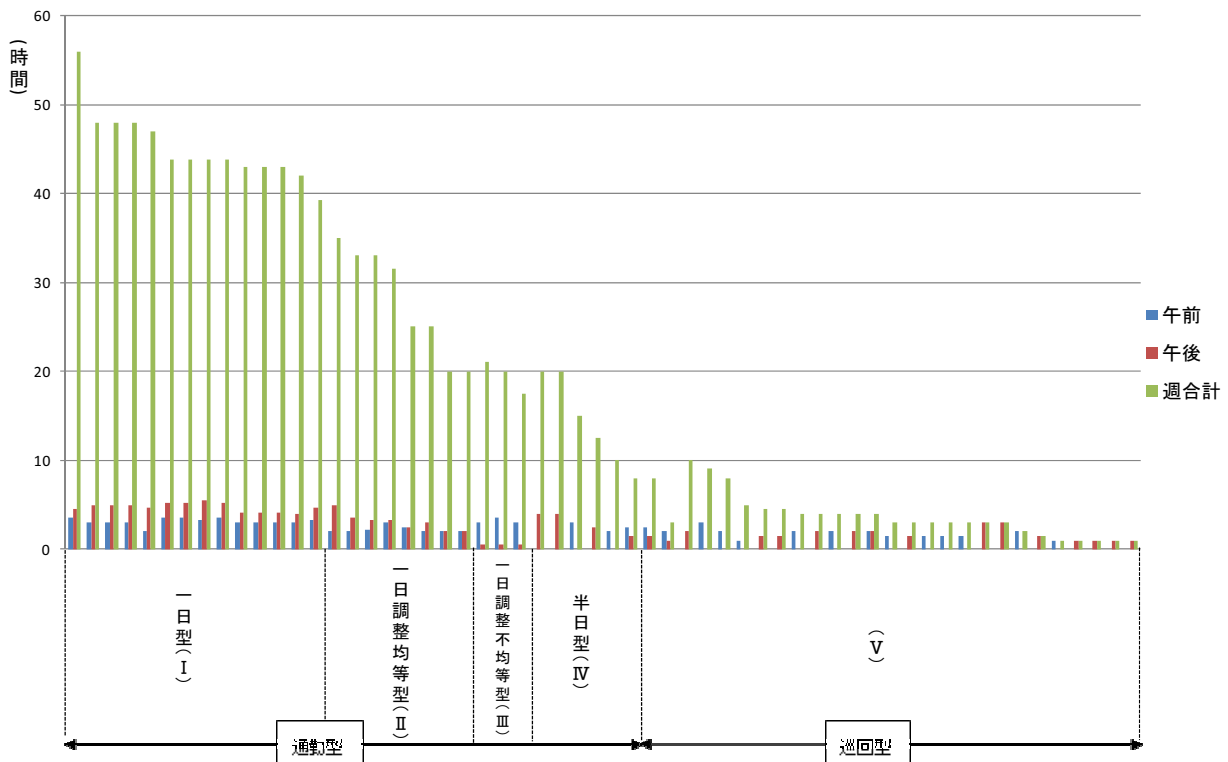


図7 団地別，LSAの勤務時間と勤務形態のタイプ (n=58)

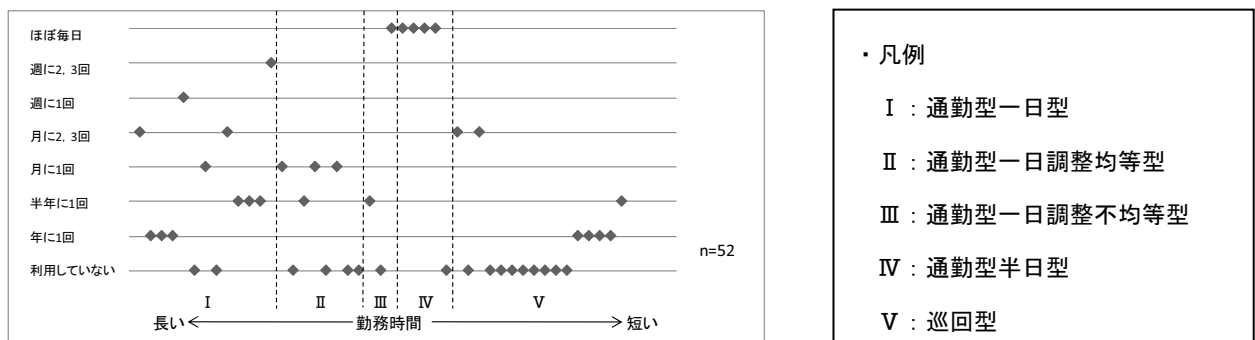


図8 団地別，LSAの勤務形態タイプと高齢者生活相談団らん室の利用状況

5.3 LSAの勤務形態タイプと高齢者生活相談団らん室の利用状況

LSAの勤務形態タイプには「通勤型一日型」から「巡回型」まで、勤務時間には大きな差があることがみられたが、高齢者相互の団らん生活や扶助を形成するためには、どのような勤務形態が望ましいのだろうか。LSAの勤務形態タイプと、高齢者生活相談団らん室の利用状況の関係を示したのが図8である。

「一日調整不均等型」や、「半日型」で、「ほぼ毎日」の利用が多くなっていた。したがって、高齢者相互の交流を形成する活動は、「巡回型」では無理であるが、「通勤型」のなかでも勤務時間の長さは大きな要因でないことが分かった。典型団地に対して行ったヒアリング調査の結果も含め、各LSAの勤務形態タイプの特徴をまとめると次のようである。

①通勤一日型

勤務時間が長いため、毎日全戸に訪問する余裕があるが、その結果、訪問時間も長時間に渡る。そのため、勤務時間が一日であっても実際に団らん室に常駐する時間は半日型と変わらなかった。しかし、団らん室の利用状況はほとんど利用されていない。その要因として、L S Aが1人であることがあげられる。現在愛知県内のL S Aは3割程度が1人で1つの団地を受け持っている。団らん室を開放する場合、L S Aが1人では緊急時の対応が困難である。そのため、L S Aの複数化も検討されてよい。

②通勤一日調整均等型

L S Aは午前から午後まで勤務しているが、団らん室の利用は見られなかった。両団地に共通することは、団らん室に居住者が集まれるだけの十分な規模、設備が備わっていないことである。このことから、L S Aの勤務は、勤務時間だけでなく、団らん室の空間計画によっても左右されることが明らかとなった。

③通勤一日調整不均等型

基本的には半日型と似ており、短時間に人が集中することでコミュニティが形成されていた。それに加え、居住者が午前中や午後に外出する予定があっても、少しでも顔を見る機会を作ることができるなど、半日型よりも柔軟な対応が可能な勤務形態であるといえる。

④通勤半日型

巡回型と勤務時間にあまり差はないが、L S Aが団らん室に常駐しているため、日常的に団らん室を利用している団地が多く見られた。勤務時間を半日に絞ることで、団らん室に来る居住者が短時間に集中し、コミュニティが形成されやすいからだと考えられる。多くの団地が定期的に行事を行っており、新聞の発行やチラシの作成などL S Aの精力的な活動が目立った。このようなL S Aの積極的な関わりが、団らん室を有効利用するための重要な鍵となる。しかし、時間帯が半日に限られるため、通院などで都合が合わない居住者も少なくないことがみられた。

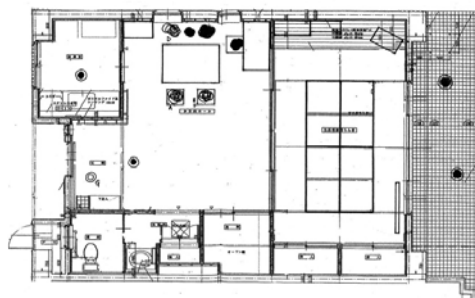
⑤巡回型

高齢者の安否を確認するという点では十分な役割を果たしていた。しかし、勤務時間が短く、他の業務を兼務しているL S Aも多いことから、高齢者同士のコミュニティを形成するには不十分な勤務形態である。

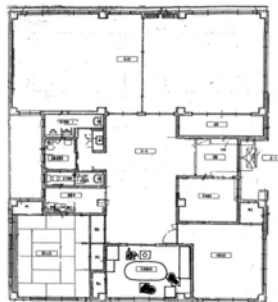
以上から、高齢者生活相談団らん室の有効利用には、L S Aの勤務時間が深く影響しているが、勤務時間だけでなく、L S Aの積極性も重要であることが分かった。団らん室において、居住者の相互交流を活発にするためには、まずL S Aと居住者の良好な関係を築く必要がある。

6. 高齢者生活相談団らん室の利用実態

図5で検討した結果から、通勤型の「一日調整不均等型」や「半日型」であっても、高齢者生活相談団らん室を「ほぼ毎日」利用していた5団地（中島住宅・福谷住宅・上野住宅・神戸久保



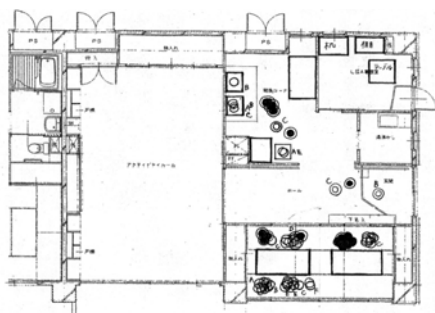
上野住宅（9：00～12：00）



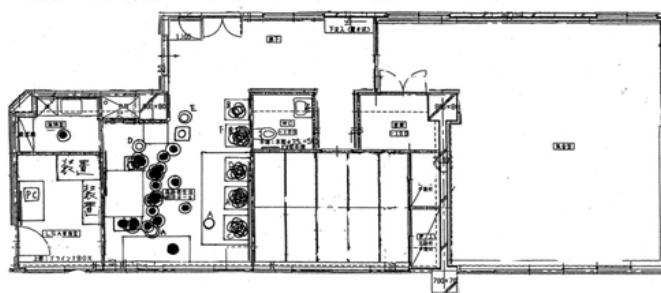
中島住宅（13：00～17：00）



福谷住宅（13：00～17：00）



神戸久保川住宅（9：00～12：30）



福祉の里住宅（13：30～16：00）

凡例

●	○
LSA(座っている状態)	居住者(座っている状態)
●	○
LSA(立っている状態)	居住者(立っている状態)

※（ ）内は、開室時間を示す。

図9 高齢者生活相談団らん室の住み方調査（利用時間内において採取された10分間ごとのデータを、すべて記入したもの）

川住宅・福祉の里住宅)を対象とし、高齢者とLSAについて、高齢者生活相談団らん室を開室している時間内における、①使っている場所と②行為を10分間ごとに観察・採取した(図9)。

6.1 高齢者生活相談団らん室の利用状況

高齢者生活相談団らん室内での居住者の移動は少なく、利用している居室は、5団地中、4団地が洋室であった。居住者である高齢者にとって、和室は足に負担がかかるため、洋室の方が好ましいという考えからである(ヒアリング、居住者アンケート調査より)。

居室構成の観点からみると、健康器具を使う居室とお茶を飲みながら団らんをする居室というように、利用用途が明らかに分けられており、その分けられた2室の間の入り口が大きく開いた続き間の構成になっているタイプの団地(神戸久保川住宅)においては、2居室とも使われていた。

5 団地すべての高齢者生活相談団らん室に共通した点は、LSA 事務室がない（利用していない）ことであった。LSA が、居住者と関わりやすい存在であるためにも、居住者の集まる場所である生活相談室や団らん室に LSA が常駐していることが重要な条件であることを示している（ヒアリング調査より）。

6.2 高齢者生活相談団らん室内での行為

図 9 について、LSA と訪れた高齢者が行っている、室内での行為について分析した。LSA は高齢者が高齢者生活相談団らん室内にいない時には、安否確認の訪問や電話、そして書類整理を行っていた。訪問や電話、書類整理に大幅な時間を費やしているということが明らかとなった（中島住宅・福谷住宅）。

また、LSA と高齢者の位置関係から、居住者のコミュニティ形成のタイプには 2 種類あるということが分かった。それは、LSA を巻き込んで会話などを行う「LSA グループ型」と、居住者同士で成り立つ「個別グループ型」である。どの団地においても、「LSA グループ型」の方が多くなっていた。このことから、居住者同士は LSA の働きによって関係を築いていると考えられ、LSA の積極的な働きかけが重要であるということが分かった。

7. 居住者の外出行動

居住者に、「普段どれくらい外出するか」を聞いたところ、「ほぼ毎日」と答えた人は、約 6 割を占めた（図 10）。年齢別にみると、「ほぼ毎日」と答えた人の割合は 75～79 歳が最も高く、35.5% であった。この年齢層から、上がっても下がっても外出の頻度は低下していく傾向にある。身体的要因から、加齢に伴い外出頻度が低くなるだけではなく、心理的、社会的要因も外出頻度に影響を与えていると考えられる。

外出する時間帯は、「平日の午前」が最も多かった。外出する目的は、「買物」が最も多く、次いで「通院」となっていた（図 11）。このことから、ほぼ毎日外出していても、他の居住者と全

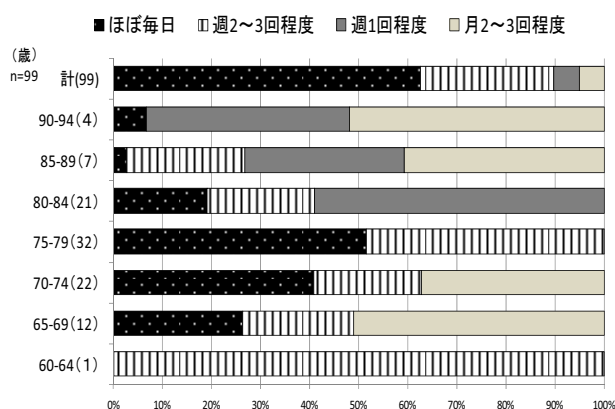


図 10 年齢別、外出頻度

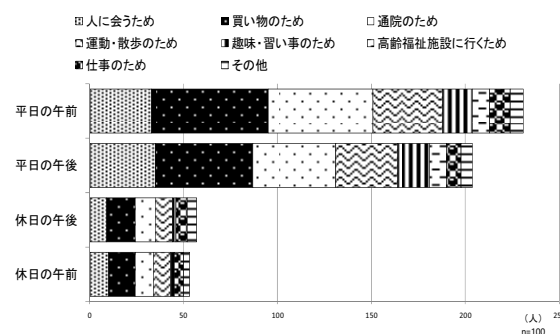


図 11 時間帯別、外出目的（重複回答）

く接しない高齢者も少なくないと考えられる。居住者の外出が少ない休日に、高齢者生活相談団らん室を開放すると良いと考えられるが、休日はLSAの勤務時間外であるため、若干ではあるものの外出頻度が少なく、落ち着いた「平日の午後」に開放することが望まれる。

8. 居住者の高齢者生活相談団らん室の利用実態

「ほぼ毎日」利用している団地を対象としたものの、「全く利用しない」人が39.6%と最も多くを占めていた（図12）。このことから、利用する人は固定化されていると考えられる。利用頻度は、団地によって大きく異なっており、建設年数が早い方が多くの人に利用されていた。時間の経過の中で、LSAと居住者との信頼関係が築かれているためと考えられる。また、大規模な団地では、高齢者の住戸が複数棟にわたるため、居住者同士の相互交流は図りにくいとされる。ヒアリング調査によると、「全く利用しない」理由には、体調不良等の身体的理由をあげている者がほとんどであった。したがって、今後は心身の機能が低下している高齢者も利用できる配慮も必要となる。

一方、利用する動機をみると、「LSAからの呼びかけ」が最も高くなっていた（図13）。このことから、高齢者生活相談団らん室の有効活用には、LSAの積極的な関わりが大切であることが分かる。

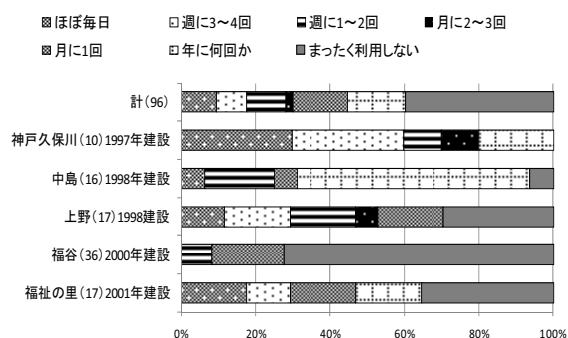


図12 高齢者生活相談団らん室の利用頻度

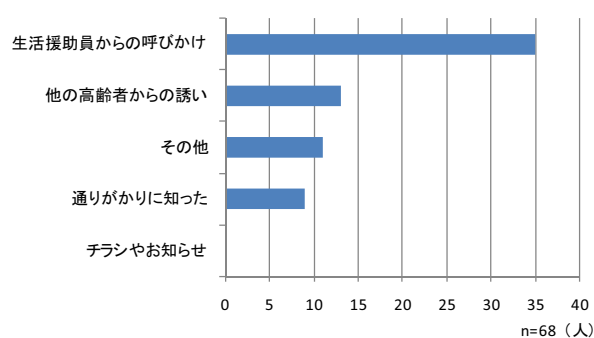


図13 利用する動機（重複回答）

9. 居住者の高齢者生活相談団らん室に対する要望

高齢者生活相談団らん室を利用しやすいものとするため、高齢者生活相談団らん室に対する要望を聞いた。

第1に、「今後高齢者生活相談団らん室で行いたいことは何か」を聞いたところ、上位4項目は、現在ほとんどの団地で現在も行われているものであった（図14）。このことから、引き続き行って欲しいと感じている居住者が多いことが分かった。また、「LSAとのおしゃべり」や「LSAへの相談」が上位にあがっていることから、居住者は、高齢者同士の触れ合いよりも、LSAとの交流を求めている実態があり、LSAの役割は重要である。

第2に、「部屋の居室構成は和室と洋室のどちらが良いか」を聞いたところ、「洋室」を選んだものが全体の78%という結果となり、「和室」を大きく上回った(図15)。その理由として、多くの方が「座りやすさ」をあげている。和室は、足腰への負担が大きいからである(ヒアリング調査より)。このことから、部屋の構成は「洋室」の方が適しているといえる。

第3に、「高齢者生活相談団らん室の団地における位置について、利用しやすいものはどれか」を聞いた。選択肢は表2の通りである。この中で、順位付けをしてもらったところ、Aのタイプを1位にあげた人が45人と最も多い結果となった(図16)。また、BとCのタイプを比較すると、1位と2位の合計人数から、Bのタイプの方が望まれていることが分かる。このことから、居住者は「住宅から近いこと」を最重視していると考えられる。さらに、同じ住棟内でも、Aのように、外から室内が見える方が好まれている。これは、Bよりも「開放的で入りやすい」からと考えられる。

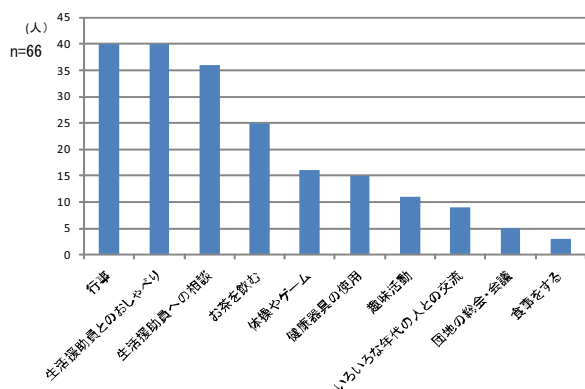


図14 今後高齢者生活相談団らん室で行いたいこと (重複回答)

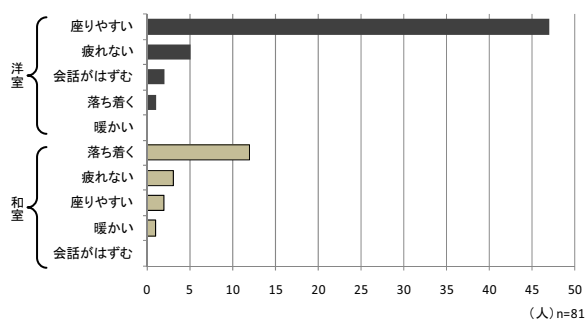


図15 高齢者生活相談団らん室の構成別、理由 (重複回答)

表2 団地における位置のタイプ

住棟内	A. 外から中が見える団らん室
	B. 外から中が見えない団らん室
別棟	C. 独立した団らん室

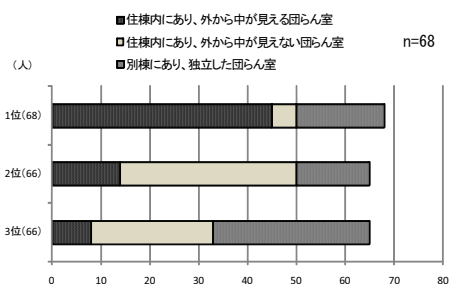


図16 利用しやすい高齢者生活相談団らん室の位置

10. まとめ

高齢者生活相談団らん室の利用と、LSAの勤務時間との相関関係が明らかとなった。高齢者生活相談団らん室の利用が活発な団地では、LSAの勤務形態が、滞在時間の長さによるものではなく、「一日調整不均等型」や「半日型」に集中していたことから、コミュニティの形成においては、半日でも可能であることが分かった。長い勤務するよりも、高齢者と接する機会を追求した、効率的な内容の勤務を行うことの方が有効なのである。そのため、高齢者生活相談団らん室は、居

住者の生活時間を考慮した平日の午後に開放することが望ましいと考えられる。また、利用する動機は、「LSA による呼びかけ」が最も多かったことから、LSA の積極的な関わりが不可欠である。LSA は、業務内容を巡回や見守りだけに留めることなく、継続的に居住者と深く関わり信頼関係を築くことで、コミュニティの形成につなげることができる。そのため、居住者の集まる場所に LSA が常駐していることが重要である。

空間計画を検討した結果、団地における位置と居室構成の方向性がみられた。団地における高齢者生活相談団らん室の位置は、居住者の住宅に近い住棟内にあり、かつ開放的で気軽に入りやすいものが求められていることが明らかとなった。居室構成については、足腰への負担が軽減される洋室が望まれるが、利用用途によって使い分けられるよう、洋室 1 部屋と、和室 1 部屋があり、さらに、居住者の移動のしやすさを考慮し、その両者が続き間となっていることが好ましい。

註

- 1) 文献 2) による。

参考文献

- 1) 内閣府政策統括官（共生社会政策担当）「平成 22 年版高齢社会白書」（2010）
- 2) 都市住宅学会中部支部 シルバーハウジング研究会「高齢社会に対応した公的住宅の必要機能について 調査報告書」（2010）
- 3) 財団法人 高齢者住宅財団「生活援助員ハンドブック」（2007）
- 4) 財団法人 高齢者住宅財団「高齢者住宅担当者研修会テキスト」（2010）